

書を抱えてフィールドに出よう！



グローバル・ヘルスと持続可能な社会 —健康の課題からSDGsを考える—

著 者：小林 尚行

出版社：明石書店 2025年2月発行

だけでなく、読みながらタイムスリップをしたり、海外を訪れたりするような気持ちになります。また、アルマアタ宣言の採択に至った背景や、日本の結核から新型コロナウイルスに至る感染症に関する項では、過去から何を学ぶか自ずと省察へ導かれます。

この書籍で最も印象深いのは非感染性疾患の章です。ここでは、様々な国において死因や死亡数がどのように変化したかを図示し、疾病構造の変化について解説しています。そこから、その地域における人々の生活の変化について推測し、都市化や環境の変化から私たちの健康が

どのような影響を受けるのか、どのような予防や治療ができ得るのかを論じています。「痛い目にあわないとわからない（本書，p.176）」と行動変容の難しさを断じつつも、生まれた国によって小児がんの子どもの予後が左右される記述からは、筆者の悲痛な心情が筆致から伝わってきます。

最後に、筆者がこれらの文章をどのような思いで紡いだのか、読者への温かくも深いメッセージが巻末に記されています。内容だけでなく、筆者からのメッセージも必読の一冊です。

（紹介者：戸田登美子）

この本では、グローバル・ヘルスという概念について「身近なところから（本書，p.16）」説明が始まり、健康やユニバーサル・ヘルス・カバレッジなどについてわかりやすく解説されています。

どの章も時代や地理的な変遷について数値を示しながら説明が繰り広げられるので、読者はその状況をイメージできる



ワクチンの噂 どう広まり、なぜいつまでも消えないのか

著 者：ハイジ・J・ラーソン 小田嶋由美子 訳

出版社：みすず書房 2021年11月発行

者、拡散者などあらゆる人々の経験、感情、信念、ときには政治や社会に対する不安や反抗も含まれます。

筆者は噂を否定するのではなく、その噂が形成される仕組み—本書では噂の生態系と表現しています—を理解することが重要であることを提示しています。私自身はワクチンを当たり前のように接種してきましたが、その背景には、生活環境や社会状況など様々な要因があつてのワクチン接種であり、ワクチン接種をしない人にはその人なりの理由があり、単純にワクチン賛成・反対でとらえるものではないとの認識が深まりました。

公衆衛生上、ワクチンの重要性は今後も強調されると思いますが、市民との対話を行い、公衆衛生への取り組みに市民を参加させることが重要であるという筆者のメッセージは、公衆衛生に関わる人々にとって心得るべき視点だと感じました。

自分とは違う意見を持つ相手に対して、どう理解を深めるか、対話をしていくのか、他者理解についても考えるきっかけにもなりました。本書を通じて、ぜひワクチンについて、他者理解について考えてみませんか。

（紹介者：福井沙織）

「噂」という言葉を聞き、皆さんはどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。

本書は、実務者、また人類学者として長年ワクチンと向き合ってきた筆者が、ワクチンの噂—ワクチンに対する抵抗感や嫌悪感—が形成される仕組みをあらゆる視点からひも解いています。それは単純なものではなく、市民、医療者、科学